

アジアから見た日本 《前編》

—日本語スピーチ発表会の歴史を振り返る



第3回発表会
(1988年)

日本在外企業協会（日外協）
業務部 主幹 須藤 真

日本在外企業協会（日外協）では、国際交流活動の一環として、アジアを中心に海外各国で行われる「日本語スピーチ・コンテスト」の優秀者を毎年日本に招いて発表会を開催してきた。本年は、1986（昭和61）年のスタートから数えて30回目という節目を迎える。

これまでに行われた約300の日本語スピーチは、日常生活から社会問題、政治経済に関するものまで実に多彩である。「アジアから見た日本」という視点を私たちに提供してくれるものも少なくない。また、その時々国際情勢やアジアと日本との関係を映し出しているものがある。それらの一端を紹介するとともに、各国の代表として来日した若者たちの多くがその後、ビジネスや教育など様々な分野で自国と日本との架け橋となって活躍している様子をお伝えしたい。

日本の海外進出が加速（1980年代）

1980年代は日本企業の海外展開が本格化した時代である。特に、1985年のプラザ合意以降、円高の進行により、生産の海外シフトが加速した。1986年の第1回大会ではマレーシアの日系企業に勤務するチョン・メイ・キューさんが、日本人駐在員の熱心な仕事を紹介。次のように述べた。「もし、マレーシア人が日本人のように熱心に仕事をすれば、マレーシアももっと繁栄することができます。すなわちルックイースト政策の一部を現実とすることができます」。マハティール首相（当時）が「ルックイースト」政策を提唱した

のは1981年のことである。

1980年代は、香港、シンガポール、韓国、台湾がNIEs（Newly Industrializing Economies 新興工業経済国・地域）と呼ばれ、急速な経済成長で世界的に注目を集めた時代でもある。ところが1985年、シンガポールはマイナス成長に陥る。シンガポール代表の女子大学生フー・クイ・ジュンさんは、政府の賃金抑制策などで家族や友人が苦勞している様子を紹介。それでも、「景気後退は、シンガポール人としては価値のある体験です。（中略）国の実力が証明されるためには若い人たちが力を合わせて、今を切り抜けなければならないということです」。また、「もっと多くの日本企業がシンガポールに投資して下さり、そして、日本に関係した職場が増え、私のように日本語を勉強している者が役立つようになることを願っています」。シンガポールは2007年、1人当たりGDPで日本を抜いている。

日本政府は1970年代末から80年代を通じてアジア向けを中心にODA（政府開発援助）を大幅に拡大、1989年には米国を上回り世界最大の援助国になっている。1987年の第2回大会では、日本のODAが話題になった。「2学期になってLL教室が日本の援助によってできました。テープを使って会話もできるし、自分の声を聞くこともできます。ひとりで日本語の勉強ができるようになりました」とフィリピンのルエル・マガヤネスさんは日本の援助を歓迎。これに対しタイ代表の女性は、1970年代に日本の経済進出への反発から学生デモが発生した経緯を踏まえ、日本の